

事後評価報告書(日-インド研究交流)

1. 研究課題名:「人工知能と心理学の接点としての評価・感情分析」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:国立大学法人東京工業大学精密工学研究所 教授 奥村 学

2-2. 相手側研究代表者:ジャダプール大学コンピューター科学工学部

教授 Sivaji Bandyopadhyay

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

これまで対象とされてこなかったオノマトペなど新規な評価表現に対する極性推定手法の開発、評価分析技術に不可欠な依存構造解析器の開発などほぼ予定通りの成果が得られ、日本側のみで4編の原著論文、インド側との共著で2件の原著論文があることは評価できる。

当初目的には、心理学領域における応用開発もそのターゲットとして含まれているが、概括的な記述しかないので、具体的にどこまで検討したのか分かりにくく、成果を報告書から読み取ることが出来なかった。

(2)交流成果の評価について

一方、学生もメンバーに含まれており、3週間~4週間ほど互いに相手国に滞在し、交流を行っており、双方の学生の育成に寄与したのではないと思われる。実際、研究職を目指した学生は、既に活躍しており、若者の育成という意味で、彼らの今後の成長に期待したい。

本プロジェクトをきっかけとして、ワークショップを国際会議に併設して開催してきた。これまで3回開催されており、それなりの手応えがあるようである。書籍の出版も計画されており、交流によって生まれた新しい分野の発展が期待される。

自然災害ゆえに致し方ないことではあるが、東日本大震災の影響でインド側からの訪問がなかったのは残念である。インド側について、共同研究の相手側との協力はなされているが、(当初の計画に反して、)それ以外のグループへの広がりは見えていない印象である。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

日本側の研究成果、インドとの共同研究成果などから、プロジェクトはほぼ予定通り行われ、成果の発表も十分に行われているようである。今後、当初予定していた心理学領域における応用開発も期待したい。